

転倒・転落ゼロにむけて ～小児病棟における転倒・転落のリスク解析～

河上 千尋¹⁾²⁾、松島 礼子¹⁾、小川 哲¹⁾、玉井 浩²⁾
(大阪府済生会吹田病院小児科¹⁾、大阪医科大学小児科²⁾)

【背景】

入院患者の転倒・転落（以下「事故」）は、どの医療施設でも発生する共通の事象であり、事故低減をいかに図るかは、医療者に課せられた安全管理上最も基本的な課題である。小児病棟における事故の特性および事故発生のリスク因子を探索する目的で、過去1年間に病棟内で発生した事故についての後方視的調査とリスク解析をおこなった。

【対象・方法】

単施設・非介入の後方視的観察研究である。2014年1年間の小児病棟入院患者全例の診療録とインシデントレポートをもとに、1) 事故事例の解析、2) 転倒・転落率の計算、3) 事故あり群対事故なし群の比較解析、を実施した。

【倫理的配慮】

病院倫理委員会審査承認済み。

【開示すべき事項】

演者全員に開示すべき利益背反事項なし。

【結果】

1) 「男児」・「年齢1～3歳」・「ベッドに関連した事故」が比較的多かった。全16件中12件（75%）が入院24時間以内と退院24時間以内に偏って発生しており、事故発生時点滴あり・なしには有意差がみられた（ $p=0.03$ ）。2) 入院1000人あたり1日あたり1.95であり、文献的標準値1.36（藤田ら、小児看護42:80-83, 2012）に比べて高かった。3) 当病棟における事故の危険因子は「年齢1～3歳」（オッズ比=5.8、 $p=0.006$ ）であった。

【考察】

今回の結果は、現行の防止策では効果的に事故を抑止できていないことを示唆している。調査結果を踏まえ、現行の防止策に加えて小児病棟の特性に沿った独自の対策を追加して事故を減らすことを目的に、事故防止策に関する前向き試験を開始した。

【結語】

事故の背景は多彩である。事故を減らすには標準的事故防止策に加えて、施設の特性に沿った独自の対策の追加が必要と考えられる。